

研 究 成 果 報 告 書

(ふりがな) やまもと さとる

氏 名 山本 悟

現 職 (所属名、職名等) 新潟県立高田南城高等学校 非常勤講師

修了又は卒業年月、専攻又は専修コース名

平成22年修了 教科・領域教育専攻 生活・健康系コース (保健体育)

この研究では、マット運動の「手つなぎ前転」の指導方法の開発をスポーツ運動学の視点を手掛かりにして行われた。

指導方法の開発の手順は以下の通りである。まず、筆者の過去の授業実践における「手つなぎ前転」の指導の省察から、指導上の問題点を挙げた。この問題を解決するための観点を得るために、これまでの「手つなぎ前転」の指導における筆者の志向体験の省察、すなわち、観察や交信といった志向分析を通して得た情報を基に運動構造の分析を行った。この分析から、指導のための観点を考案し、具体的な指導方法（段取り）を構成した。そして、この新たな指導方法に基づいて授業実践が行われた。

授業実践では、13名中13名の受講生すべての学習者が「手つなぎ前転」を習得できた。このことから、新たに開発された指導方法の有効性が示唆された。

この研究で検討された「手つなぎ前転」の指導方法についての留意点を示すことで指導現場への還元を図りたい。

1) 他者とタイミングあわせた前転を志向すること

手つなぎ前転の成立には、始めと終わりのタイミングを他者と合わせることを求められる。学習初期では、手をつながない前転において他者とタイミングを合わせた前転を習得することで、手つなぎ前転が発生しやすくなる。

2) 「前後開脚立ちの体勢」から前転を開始すること。

これは、「手つなぎ前転」を実施する際の恐怖心の軽減（特に3人組の真中）や順次接触を成立させるために有効である。両足踏み切りの「手つなぎ前転」では、その構造的な特性から、“とび動作”が生じやすいため、恐怖心を生じさせるだけでなく、順次接触が極端に乱れた動きを発生させやすい。このような問題を防止するために、「前後開脚立ち体勢」からの前転で学習を進めることが有効である。

3) “やりやすい側の手”と“やりにくい側の手”を確認すること

人間には‘利き手’と言われるように‘何かを為すために’使いやすい側の手や足がある。手つなぎ前転では、「手をつなぎながら前転をする」ということが課題であり、実施者の立つ側によってつなぎ手が「右手つなぎ」なのか「左手つなぎ」なのか変化する。学習初期では、“やりやすい側の手”から学習を進め、その動きの感じを充実させてから“やりにくい側の手”で挑戦することが望ましい。“やりやすい側の手”と“やりにくい側の手”の両方での運動感覚を充実させることに両手をつないだ手つなぎ前転（3人組の真中）の発生を促すことが容易になる。